

『殺人の追憶』

2003年／韓国／ポン・ジュノ監督作品

真実とは何か？

—ある種の真実は、嘘でしか語れない

会員 丸山 輝 (62期)

1986年ソウル近郊の農村で発生した猟奇な無差別連続強姦殺人事件を解明するため、地元のベテラン刑事とソウル市警から派遣された熱血エリート刑事が対立しながらも真犯人検挙に迷走した末に辿り着いた衝撃的な結末は…。

本作品は、1986年～1991年軍事政権下の韓国で10人もの犠牲者を出した「華城連続殺人事件」という実在の未解決事件をモチーフとしている。事件の詳細は？ 渦中の人々は？ 舞台となった韓国の、土地の歴史的背景は？ …当初、そのようなことが描かれているのかと思って10年前、新宿の映画館で観た。けれど違った。“真実とは何か？”本作品で描かれているのは、そのことだけに尽きた。“のみ”という言い方は少し語弊があるかもしれない。実際には、事件の顛末も、人々のことも、歴史的・社会的背景も丹念に描かれていた。時代・社会の暗さや人間の業の奥深さも。けれどもそれら全部をひっくるめ、本作品は、結局、“真実とは何か？”を、ただ克明に、執拗に、時の経過とともにノスタルジックに描き切っていた。凄いと思った。これは映画でしか表現できないことだと、強く思った。そして、突き詰めて、突き詰めて、最後に辿り着いた結末だからこそ、少女が呟く最後の言葉は、残酷でありながら、素晴らしいリアリティーをもって、深く深く観る者の心の奥底にまで届き、魂を揺さぶるのである。

映画とは一体何なのか？ 映画はどのように存在するのか？ 人はなぜ映画を必要とするのか？ 喜びも悲し

みも楽しみも寂しさも、現実にあるもので十分だと思われるのに、どうしてわざわざフィクションに過ぎない映画が必要になるのか？

その答えはつまりこういうことだ。

「ある種の真実は、嘘でしか語れない」のだ。

黒澤明やタルコフスキーやキューブリックやスピルバーグやチャップリンといった本物の映画監督なら皆知っている。ムチャクチャ本当のこと、大事なこと、深い真相めいたことに限って、ありのままを表現してもどうしてもその通りに伝わらないことを。そこでは嘘を介在させないと、本当らしさが生まれてこないのだ。涙を流して呻いて喚いて鼻水まで垂らしても悲しみ足りない深い悲しみ、素っ裸になって飛び上がって喜色満面叫んでみても喜び足りない大きな喜び、そういう正攻法ではどうしても表現できない何か手ごわい物事を、映画でならうまくすれば伝えることができる。伝えたい真実を、嘘の表現で描き、そんな作り物をもってして涙以上に泣き、笑い以上に楽しみ、痛み以上に苦しむことのできるもの、それが映画なのである。本物の映画監督は、決して本当に起こったことは描かず、起こりえたはずなのに起こらなかったことか、そもそも起こりえなかったからやはり起こらなかったことだけを描きながら、実際に起こったことや自分が伝えたいことを、どこかで部分的にでも表現できたらと願っている。本当に伝えたいこと＝真実は、実際に起こったことの傍に、その向こう側に、何があったかなのだ。本作品はまさにそういう作品であり、ひらたく言えば、紛れもない傑作である。